

調 査 研 究

日本人女子コウホートの 結婚と出産，死亡によるライフコース

渡 邊 吉 利

I 目 的

女性の生涯においては結婚や出産などの人口学的事象によってその生活段階が変化するが，日本人女性におけるその生活段階変化の年齢を何歳で迎えるかといったことについて，これまで幾つかの研究が行われてきた。すなわち，鈴木栄太郎以来，森岡清美，青木尚雄といった人々によって家族周期の研究として世帯内の世帯主や配偶者，子供といった家族員の種々の生活段階に関する分析が行われ，その一環として家族内の女性の結婚・出産といった生活段階への到達年齢などについての分析も行われてきた。これらの研究は，これまで必ずしも十分に明らかではなかった日本人女性の生活段階のタイミング等について多くの知見をもたらすものであった¹⁾。

しかし，これらの先駆的研究においては，日本人女性の生涯についてある典型的なパターンを前提としてきた。すなわち，それらの研究によれば，日本の社会に生まれた女性がその誕生から死にいたるまでにたどると想定されている典型的な生涯のパターンがあり，それは，女性は誕生すると幼少期を経て結婚し，出産し，子供を育てて，子供が結婚して三世帯家族を構成するかまたは独立して巣立っていくまで，夫とともに生活をともにするというものである。

こうした典型的なライフコースの想定によって先人達の研究は大多数の女性の生涯に関する知見に多くの成果をもたらしたことは事実であるけれども，同時に，これまでの研究の観点においては，典型以外のコースをたどる女性の生涯についての考慮を事実上ほとんど忘れさせてきた。すなわち，あたかもすべての女性が結婚し子供を産み子供が成長して独立または結婚するまで死ぬこともないかのようにより，事実上それ以外の生涯を送る女性のことを考慮に入れることは少なかった。

本稿は，日本人女性のうち1890年から1930年までに生まれたコウホートについてその生涯を結婚，出産，死亡といった人口学的事象の有無別のライフコースに分けてその割合を検討しようとするものである。すなわち，ここで提起するライフコース分析は，必ずしもすべての女性が典型的な生涯の生活段階を経験するものではないことに着目して，女性が経験するライフコースのタイプ（型）別の分

1) 家族周期あるいはライフサイクルの日本における研究の始まりは鈴木栄太郎の「日本人家族の世代的発展に於ける周期的律動性に就いて」戸田貞三・鈴木栄太郎監修『家族と村落（第二輯）』日光書院（1942年）[お茶の水書房（復刻版1978年）]，pp.1-50.である。その後の研究は森岡清美『家族周期論』培風館（1973年）に集約されると思われるが，その外にもライフサイクルの研究はかなり多く人口学分野の周辺における女性のライフサイクルに限っても小林和正「夫婦の出生歴データのライフ・サイクル的集計」『人口問題研究』第104号（1967年10月），pp.39-48.あるいは伊藤秋子・新垣都代子「ファミリー・サイクルのモデルの作成」『家政学雑誌』第21巻第1号（1970年），pp.83-87.や青木尚雄「女性のライフ・サイクルの一試算」『人口問題研究所年報』第19号（1974年），pp.35-38.といった業績が目につく。

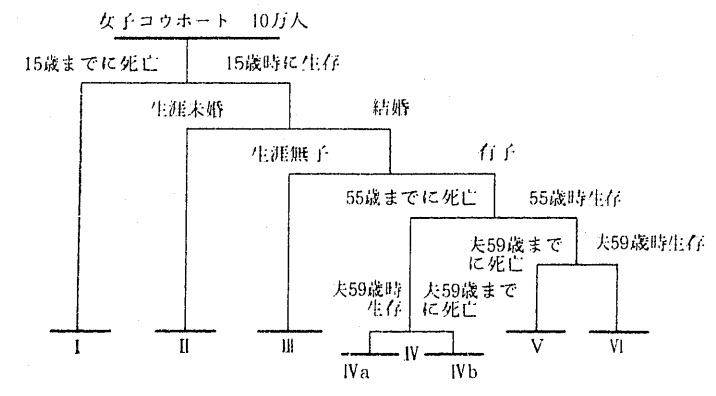
布に焦点をあてたものである。

言い換えれば本稿は、生まれた女性の中で、これまで典型的とみなされてきたライフコースをたどる女性がどの位の部分を実際に占めていたのか、また、典型以外のライフコースすなわち未婚のまま生涯を終える女性あるいは結婚しても子供が生まれぬまま生涯を終える女性等がどの位の割合であったのかといったそれぞれのライフコース別の相対的な比重の解明を、1890年、1900年、1910年、1920年、1930年の五つの女子出生コウホートについて行うことを目的とする。また次節以降に述べるように本稿は、アーレンバーグ (P. Uhlenberg) がマサチューセッツ州におけるアメリカ生まれの白人女性について行った分析方法の日本人女性への適用であり、日本人女性のライフコースとアメリカ女性のライフコースとの相互比較をも目的とする²⁾。

II 方 法

女性のライフコースを実際にどのように分けその計算をどのように行うかについて、基本的にはアーレンバーグによって示された方法をそのまま踏襲する。具体的には、出生時10万人の女子コウホートを以下に述べる6つのライフコースに分け、10万人のコウホートから各ライフコースに分かれる確率を計算した。すなわち、ここで問題にする6つのライフコースとは、次のようなものである。その第一のタイプは、15歳に到達する前に死亡する女性達であり、すべて未婚女性だけからなる。この第一のタイプのライフコースを、本稿では、早世型のライフコースと呼ぶことにする。第二のタイプのライフコースは、15歳未満で死亡することはないが(15歳時生存)その後の人生を未婚のまま生涯を終える女性であり、これを未婚型のライフコースと呼ぶ。第三のタイプのライフコースは、結婚はするが、その後は無子のまま生涯を終える女性であり、これを無子型のライフコースと呼ぶ。第四のタイプのライフコースは、結婚して子供を生み母となるが、末子が一人前になる前に死亡する女性であり、これを母死亡型のライフコースと呼ぶことにする。第五のタイプのライフコースは結婚し、母となり、末子が一人前になるまで生存するが、夫は末子が一人前になる前に死亡して未亡人となるもので、有子の未亡人型と呼ぶ。最後に、第六のタイプのライフコースは、結婚し母親となり夫とともに末子が一人前になるまで生存する女性達からなるもので、これまで家族周期論などで考察されてきた典型的なライフコースに相当するものである。この最後に挙げたライフコース

図1 女子のライフコース分岐図



- I. 早世型：15歳までに死亡のケース。
- II. 未婚型：15歳時生存、50歳までに未婚のまま死亡のケース。
：50歳時に未婚のまま生存のケース。
- III. 無子型：15歳時生存、結婚、50歳までに無子のまま死亡のケース。
：結婚、50歳時に無子のまま生存のケース。
- IV. 母死亡型：15歳時生存、結婚、55歳までに有子で死亡のケース。
IVa. 母のみ死亡型：15歳時生存、結婚、有子、55歳までに死亡、夫は59歳時に生存のケース。
IVb. 父母とも死亡型：15歳時生存、結婚、有子、55歳までに死亡、夫も59歳時に死亡のケース。
- V. 有子未亡人型：結婚、有子で55歳時に生存、夫は59歳時までに死亡のケース。
- VI. 完全結婚型：結婚、有子で55歳時に生存、夫は59歳時に生存のケース。

2) Peter G. Uhlenberg, "A Study of Cohort Life Cycles: Cohort of Native Born Massachusetts Women, 1830-1920", *Population Studies*, Volume 23. Part 3 (November 1969), pp.407-420. 参照。

を完結型のライフコースと呼ぶことにしよう。図1に、各ライフコース相互の関係について分岐図が示してある。

なお、ここでの分析においては、各コウホートにおける末子が一人前になるときの夫妻の年齢について次のような前提をおいた。末子が一人前になるときに妻が55歳、夫が59歳として、その夫妻の年齢差は4歳とした。なお、この末子が一人前になるときの夫妻の年齢の設定については改めて触れる。

1. コウホートの結婚、出生児数および死亡に関するデータ

実際の計算に用いたデータは結婚についてのもの、出産の有無および出産ありの場合の出生児数に関するものと死亡に関するものがある。コウホートについてのデータは一般に非常に少ないので、これらのデータの多くは何らかの仮定を設けて作成せざるを得なかった。

まず、結婚の有無別の女子割合すなわち未婚率と既婚率のデータについては、国勢調査の配偶関係別のデータを5年毎のデータを5歳ずつずらしてコウホートの的に組替えて用いた。ここでのコウホートの的なデータの組替えとは、例えば1910年生まれのコウホートは1930年には20歳になっているので、1930年20歳の未婚・既婚のデータは1910年コウホートのものとみることができる。また多くの場合、その前後数年のコウホートは実質的に同様な傾向を示すものとみてもそれほど不当ではないので、1930年調査の18歳から22歳までの既婚・未婚の割合は1910年コウホートの既婚・未婚の割合を示すものとして扱った。また、国勢調査は1920年以降なので1900年以前のコウホートに関しては若い年齢の時のデータがないことになるが、1920年の該当年齢のデータをもって代用した。また、1945年についても国勢調査のデータが得られないので、1940年と1950年のデータの平均を用いた。

コウホートの無子率および出生児数のデータについても、未婚率と同様、国勢調査および出産力調査のデータを組替えてコウホートのデータとして用いた。

ここで、各コウホートにおける末子が一人前になるときの夫妻の年齢をどのように設定したかについて触れよう。先に少し触れたが、ここでの分析においては各コウホートにおいて末子が一人前になるときに妻が55歳、夫が59

歳として、その夫妻の年齢

差は4歳とする。そして、この末子が一人前になるときの夫妻の年齢や夫妻の年齢差を、1890年から1930年の出生コウホートについて一律に適用する。これは研究の初期段階として単純化したパラメタによって試算を行ったということである。

それにしても、各コウホートの生涯の違いを検討しようとするにあたってこのような単純化を行うにはある程度の理由が必要となろう。通常、末子が一人前になるときの親の年齢は末子を何歳で生んだかということと、

表1 女子コウホートの年齢別未婚率

年 齢	1890年 コウホート	1900年 コウホート	1910年 コウホート	1920年 コウホート	1930年 コウホート
15-19歳	82.3	82.3	85.9	92.5	96.1
20-24歳	31.4	31.4	37.7	53.5	55.3
25-29歳	9.2	7.8	11.1	14.4	20.6
30-34歳	4.1	3.7	5.3	5.7	9.3
35-39歳	2.3	2.4	2.9	3.9	6.4
40-44歳	1.8	2.0	2.0	3.1	5.2
45-49歳	1.5	1.5	1.7	2.8	4.8
50-54歳	1.3	1.2	1.6	2.7	4.5
SMAM	21.2歳	21.2歳	21.9歳	23.1歳	23.7歳

注) SMAM (singulate mean age at first marriage) は未婚率の減少パターンから推定する初婚年齢で、その方法はヘイナル (J. Hajnal) の考案による。J. Hajnal "Age at Marriage and Proportions Marrying", *Population Studies*, Volume 7. Part 2 (November, 1953), pp.111-136. 参照。

表2 女子コウホートの完結時の出生児数分布

コウホート (データ)	出生児数分布(%)				平均 出生児数	対 象
	0人	1~3人	4~6人	7人以上		
1890年コウホート (1950年国勢調査 55歳以上)	11.2 —	25.6 28.8	32.6 36.7	30.6 34.5	4.7 5.3	全既婚 有子のみ
1900年コウホート (1950年国勢調査 45-54歳)	9.4 —	26.3 29.0	33.4 36.9	30.9 34.1	4.8 5.3	全既婚 有子のみ
1910年コウホート (1960年国勢調査 45-54歳)	7.8 —	33.2 36.0	40.5 43.9	18.5 20.1	4.2 4.6	全既婚 有子のみ
1920年コウホート (1970年国勢調査 45-54歳)	8.1 —	56.3 61.3	32.5 35.4	3.1 3.4	3.0 3.3	全既婚 有子のみ
1930年コウホート {(1970年国勢調査 40-44歳) (1974年世界産力調査 40-44歳)}	6.4 —	81.6 87.2	11.5 12.2	0.5 0.6	2.3 2.5	全既婚 有子のみ

その子が何歳で一人前になるかによって決まる。末子を何歳で生んだかといことは、ほぼ結婚年齢と出生児数によって決まるといえる。まず、表2におけるヘイナル(J. Hajnal)の方法によって計算したコウホートの初婚年齢をみると1890年から1900年のコウホートでは21歳であったが、1910年頃のコウホートから初婚年齢は上昇を始め、1920年では23歳、1930年のコウホートでは24歳近くとなり、結婚が次第に遅くなっ

表3 既婚女子コウホートの年齢別無子率 (%)

年 齢	1890年 コウホート	1900年 コウホート	1910年 コウホート	1920年 コウホート	1930年 コウホート
15-19歳	—	—	—	—	57.7
20-29歳	—	—	—	22.5	24.5
30-39歳	11.2	9.4	9.0	8.5	7.6
40-49歳	11.2	9.4	3.5	9.1	7.6

注) データは、1950年、1960年、1970年 国勢調査における出生児数別、既婚女子数による。

1890年コウホートおよび1900年 コウホートの30歳以上の年齢については1950年国勢調査におけるそれぞれ55歳以上のデータおよび45-54歳のデータにおける無子率を30歳以上の年齢に適用した。15-19歳および20-29歳に相当するデータは必ずしもすべてのコウホートについて得られないので、1930年もしくは1920年コウホートの数値を用いた。

てきた³⁾。このことは、当然のことながら、他の事情が変わらなければ末子の一人前になるときの親の年齢を高める要因となる。一方、出生児数をみると子供を有する既婚女子の完結出生児数は1890年の5.3人から1930年のコウホートでは2.5人へと減少を示した⁴⁾。このことは、末子の出産年齢を低下させる要因となる。すると、出生児数の減少と結婚年齢の上昇が相殺しあって、結果として末子の出産年齢はある程度の低下を示したと思われるが、出生児数の低下から直接的に想定されるほどでは

3) 未婚率の減少パターンから計算する初婚年齢で、その方法はヘイナルの考案になる。J. Hajnal, "Age at Marriage and Proportions Marrying", *Population Studies*, Volume 7 .Part 2 (November 1953), pp.111-136. 参照。

4) コウホートの出生力水準の歴史的推移を検討したものとして、有配偶女子についてのものであるが渡邊吉利「完結出生力水準と出生意欲のコウホートの観察—各種出生力調査の妻の出生コウホートによる整理—」『人口問題研究』第158号(1981年4月), pp.46-61.を参照。

なかったと思われる。すなわち、末子の出産年齢は考察対象の初期のコウホートでは30歳台の半ばから30歳台後半にかけて、後期のコウホートでは30歳台の前半から30歳台の半ばにかけてであったとおもわれる。末子が一人前になる年齢については、一人前という言葉の意味にも関わるが、前期のコウホートでは末子が20歳前後のときであるとみても実態とのズレはそれほど大きくないであろうが、後期のコウホートになるほどその子供世代の高学歴化の進行にともなって就職年齢が上昇した結婚年齢も上昇するなどの影響があり一人前になるときの末子年齢において前期の20歳前後に比べ数年から5年程度の遅れがみられたと考えられ、考察対象コウホートの前期と後期との間では結果として末子が一人前になるときの親の年齢にはそれほど大きな違いはないと思われる。

末子が一人前になるときの親の年齢に関する前提のこのような単純化は暫定的なものであっていざれ実証的な数値によって置き換えなければならないが、以上に述べた理由によってさほど非現実的結果をもたらさないものと想定した。

死亡率については、南条・小林両教授作成によるコウホート生命表を用いた⁵⁾。なお、この生命表のデータを用いるに際して、死亡率について以下のような仮定をおいた。まず、死亡数に関しては年齢階級5歳で計算したので、年齢5歳の間隔の中では死亡率の変化は直線的であるとした。第二に、未婚者と既婚者に同じ死亡率を適用した。第三に既婚者の中でも有子の既婚者と無子の既婚者に同じ死亡率を適用した。

表4 日本人女子のコウホート生命表

年 齢 EXACT AGE	1890年 生存数 $F l_x$	1900年 生存数 $F l_x$	1910年 生存数 $F l_x$	1920年 生存数 $F l_x$	1930年 生存数 $F l_x$
0 歳	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
5 歳	67,275	69,327	73,989	76,185	80,419
10 歳	64,779	66,908	72,187	74,358	78,944
15 歳	62,838	64,971	70,316	72,906	77,954
20 歳	59,658	61,949	67,164	69,747	75,667
25 歳	56,262	58,211	63,815	66,612	74,588
30 歳	53,533	55,577	61,144	63,725	73,851
35 歳	50,745	53,217	58,819	62,536	73,274
40 歳	48,347	50,977	56,303	61,682	72,707
45 歳	46,116	48,784	54,923	60,837	72,028
50 歳	43,762	46,161	53,566	59,818	71,195
55 歳	40,959	44,100	51,933	58,524	70,120
60 歳	37,137	41,739	49,898	56,962	

資料) Z. Nanjo and K. Kobayashi, *Cohort Life Tables Based on Annual Life Tables for the Japanese Nationals Covering the Years 1891-1982.*, NUPRI Research Paper Series, No.23. (March 1985), Nihon University, Population Research Institute: Tokyo. による。

こうしたコウホートの死亡数計算上の単純化は、アーレンバーグの分析においても行われているが、その理由は何にも増して配偶関係別あるいは子供の有無別のコウホート生命表などというものが得ら

5) Zenji Nanjo and Kazumasa Kobayashi, *Cohort Life Tables Based on Annual Life Tables for the Japanese Nationals Covering the Years 1891-1982.*, NUPRI Research Paper Series No.23. (March 1985), Nihon University, Population Research Institute.: Tokyo. 本稿のようなコウホートの分析が可能になったのは南条・小林両教授によるコウホート生命表の完成に負うところが大きい。

れないことによる⁶⁾。

2. 計算方法

実際の計算は死亡女子数についてのものと、生存数についてのものに分けられる⁷⁾。死亡女子数は年齢5歳間隔の生命表上の死亡数 d_x に年齢別の未婚率を適用して未婚死亡数を計算し、引き算によって既婚死亡数を求めた。さらに得られた既婚女子死亡数に既婚無子率を適用して無子の既婚死亡数を計算し、引き算によって有子の死亡数すなわち子供を生んでから死亡した女子数を計算した。50歳ないし55歳まで累計してコウホートとしての死亡数を求めた。またさらに、夫の生存確率を適用して母親のみ死亡する場合と、両親とも死亡する場合の数を計算した。

つぎに女子の生存数の計算は50歳時と55歳時について行ったが、手順はほぼ同様であり、生命表上の生存数 l_x に50歳時の未婚率を適用して未婚生存数を求め、引き算によって既婚生存数を、ついで完結時の無子率を適用して無子の生存数をもとめ、引き算によって有子すなわち母親の生存数をもとめた。これをさらに、夫の生存確率を適用して、未亡人となる数と夫妻とも生存したまま末子の一人前になる年齢を迎える妻数とを計算した。

III 結 果

1. 日本人女性のライフコースにおける完結型と完結型以外のライフコースの相対的比重の歴史的推移

結果は表5-Iから表5-VIに示すようなものである。計算は有効数字5桁で行ったが今回の計算が種々の暫定的仮定に基づくものであること、結婚や出産などのデータの精度などを考慮したことおよび結果をトレンドとして取り上げたいなどの理由で、結果の数字は100の単位で示してある。

1) 早世型

15歳未満で死亡する早世型のライフコースは1890年のコウホートでは出生時の女性10万人に対し37200人(37%)であったが、1930年のコウホートでは22100人(22%)へと $\frac{2}{3}$ の数へと減少した。それら15歳未満死亡の女性のうち、5歳未満死亡の占める割合は終始88~89%を占める。歴史的にい

6) 通常、未婚者の死亡率は一般の死亡率よりも高いとみられており、このことは未婚者と既婚者の死亡率を同等として扱うことへの疑問となり得る。アーレンバーグにおいては次のような理由によって、未婚者と既婚者の死亡率を同等として扱うことが、実際にはそれほど非現実的な結果をもたらさないものと想定されている。すなわち、一方で過去に遡るほど未婚者の死亡率水準は近年より高かったであろうと思われるが、他方では過去に遡ったコウホートでは結婚した場合にも妊娠・出産に伴う死亡の危険も高く、逆に未婚者はこうした妊娠等による生命の危険からはまぬがれていたと考えられ、それらは相互に生涯としてみた死亡率水準の差を相殺する方向に働いた。また、既婚者の中で子供を産む女性と産まない女性との死亡率水準の差については、子供を産む女性には先に述べた妊娠・出産に伴う生命の危険があるのに対し、避妊が普及する以前の段階での子供の無い女性にはそれ自体で子供を産む能力のある女性との健康状態の差を示すものであり、結果として生涯としてみた死亡率水準の差を小さくする働きをもっていたと考えられるというものである。Uhlenberg, *op.cit.*410. なお、日本の期間死亡率における配偶関係別死亡率水準の違いについては、河野稠果「日本人夫婦に関する結婚の生命表 付、配偶関係別生命表：1955」『人口問題研究』第80号(1960年9月), pp.25-42.および石川晃「昭和50年配偶関係別生命表」『人口問題研究』第150号(1979年4月), pp.62-69.を参照。

7) 生存数、死亡数および出生児数という観点から日本人女子コウホートの追跡を行った分析として次に掲げる小林和正の研究がある。また、国勢調査の各時点における男子コウホートの生存数の追跡を行ったものとして山本千鶴子の分析がある。小林和正「1932年10月~33年9月生まれ全国日本人女子コウホートの人口学的分析」『人口問題研究所年報』第10号(1965年), pp.66-69.および山本千鶴子「1911~1940年男子出生コウホートの人口学的観察」『人口問題研究所年報』第22号(1977年), pp.23-25.を参照。

えばこの早世型のライフコースは最も多くの割合を占めたものであり、その減少はいうまでもなく女子死亡率の低下による。

表 5 - I 早世型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
15歳未満の死亡総数	37,200	35,000	29,700	27,100	22,100
1980年を100とする指数	100	94	80	73	59
0-5歳死亡の占める割合(%)	88.1	87.6	87.6	87.9	88.8

2) 未婚型

15歳まで生存するが、その生涯を未婚のまま過ごす未婚型のライフコースは、1890年の4800人(4.8%)から1930年の6400人(6.4%)へと趨勢的に増加傾向にある。これは未婚生存数の増加によるもので、1930年の未婚生存数は1890年の5倍となっている。この未婚生存数の増加は女子における死亡率の趨勢的減少および未婚率の趨勢的増加による。特に1930年コウホートについては、戦争の影響による男子の配偶適齢期人口の減少などに起因する女子未婚率の上昇が拍車をかけたと思われる。

表 5 - II 未婚型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
15-50歳未婚死亡数	4,200	4,100	4,500	5,200	3,100
50歳時未婚生存数	600	600	900	1,600	3,300
未婚型総数	4,800	4,700	5,400	6,800	6,400
1890年を100とする指数	100	98	113	142	133

3) 無子型

結婚するが子供を産まずにその生涯を終える無子型のライフコースの女性は、1890年コウホートの7300人(7.3%)から1930年の4900人(4.9%)へとその数は $\frac{2}{3}$ に減少した。これは無子女性の死亡数が $\frac{1}{3}$ に減少したことによるもので、無子の死亡数減少は既婚女性における無子率の低下と死亡率の低下によるものである。

表 5 - III 無子型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
結婚、無子の15-50歳死亡数	2,500	2,300	1,900	1,300	500
結婚、無子の50歳時生存数	4,800	4,300	4,100	4,700	4,400
無子型総数	7,300	6,600	6,000	6,000	4,900
1890年を100とする指数	100	90	82	82	67

4) 母死亡型

母親になってから死亡する女性は、1890年コウホートの14900人(14.9%)から1930年の4100人(4.1%)へと大幅に減少して $\frac{1}{4}$ の数となった。そのうち、母のみ死亡、夫生存のケースでは1890年の9400人(9.4%)から1930年の3600人(3.6%)へと減少した。また、両親死亡のケースは、1890年の5400人(5.4%)から1930年の500(0.5%)人へと $\frac{1}{10}$ 以下の数へと減少した。これらは、いうまでもなく死亡率の低下による。

表 5 - IV 母死亡型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
A. 母のみ死亡、父生存	9,500	9,900	8,700	6,500	3,600
B. 両親とも死亡	5,400	4,400	3,100	1,300	500
母死亡型総数	14,900	14,300	11,800	7,800	4,100
1890年を100とする指数	100	96	79	52	28

5) 有子の未亡人型

子供を産んでから夫に先立たれる女性は、1890年コウホートの13100人（13.1%）から1930年の10300人（10.3%）へと%の数へと減少した。

これらIVの母死亡型とVの未亡人型の二つはいずれも子供からみれば末子が一人前になるまえに親のうちのどちらか、あるいは両方を亡くしている訳で、これらIVとVのライフコースを合わせた数が1890年のコウホートでは10万人のうちの28%を占めていたが1930年のコウホートでは14%と半減したことになる。

表 5 - V 有子未亡人型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
有子未亡人型	13,100	12,000	12,400	8,700	10,300
1890年を100とする指数	100	92	95	66	79

6) 完結型

さて最後に、家族周期論などで一般には典型とされているものに相当するライフコースの完結型についてみると、1890年のコウホートでは22800人（22.8%）であり、ライフコースとしては10万人全体の1/4に過ぎないことが判かる。それが、主として死亡率の低下によって次第に増加し、1930年のコウホートでは52200人（52.2%）へと2.3倍もの増加を示して10万人の半数を超えるほどになった。

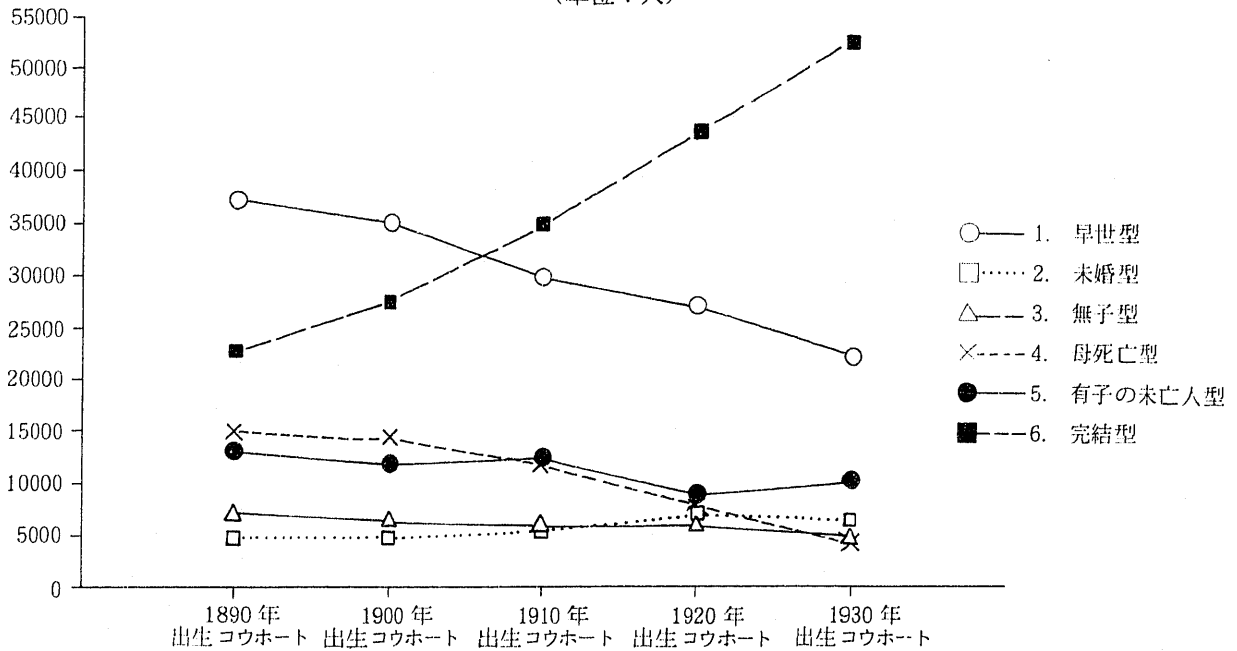
表 5 - VI 完結型のライフコース

	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
完結型	22,700	27,400	34,700	43,600	52,200
1890年を100とする指数	100	121	153	192	230

これらのライフコースのうち、IVとVとVIのライフコースはいずれも結婚して子供を生んだ女子についてのものであり、それらを合わせた中でそれぞれのライフコースの占める割合をみてみよう。1890年のコウホートでは子供を生んだライフコースの合計は50800人ほどであり、それら結婚して子供を産んだ女性を100としてその内訳をみると、母死亡型は29%、未亡人型は26%、完結型は45%であった。1930年のコウホートでは子供を生んだライフコースは全体で66700人であり、それら子供を産んだライフコースの合計を100とする内訳をみると、母死亡型は6%と1890年コウホートにおけるよりもその割合を大幅に縮小し、未亡人型は15%と母死亡型ほどではないがこれまたその割合を縮小したのに対し、完結型は78%とその割合を大幅に拡大したといえる。

これら全体の傾向を要約的に示した図2によって各ライフコースのトレンドの様子を一目で理解することができよう。

図2 ライフコース別、女子数の推移。(出生コウホート10万人のうち)
(単位：人)



2. 女性のライフコースの日米比較

以上に示したような日本人女性のライフコースは、アメリカ女性のライフコースと比べてその特徴はどのようなものであろうか。

ここで、日米比較を行う前に確認しておきたいことは、本稿における各ライフコースの定義は基本的にはアーレンバーグの分析におけると同様であるが厳密には若干異なることである。日米の定義の違いの第一は早世型のライフコースの定義に関することである。本稿における日本人女性の分析においては早世型のライフコースは15歳未満の死亡者からなるが、アーレンバーグにおけるアメリカ女性では早世型は20歳未満の死亡者からなる。これは対象としたコウホートにおける15-19歳の未婚率がアメリカと全く異なり、アメリカでは殆どが未婚者であるのに対し、日本ではその多くが既に結婚していて未婚者の割合が少ないことによる。すなわち、アメリカと同様に早世型を20歳未満とすると、早世型の中がさらに既婚者と未婚者に分かれライフコースが複雑になり、また各ライフコースと特色が曖昧となるためである。ライフコースの定義における次の違いは、末子が一人前になるときの夫妻の年齢に関して、アーレンバーグでは妻55歳、夫58歳としているのに対し、本稿における日本人では妻55歳、夫59歳としたことである。これは、既に述べたように、日本における対象コウホートの結婚年齢と出産年齢および子供の進学・就職・結婚等の影響を考慮に入れたものである。

結果は表6に示される様なものである。表6に示される日・米女性のライフコースの動向のうち、まず第一に日・米共通に目に付くのは、コウホートの死亡水準だけを直接的に反映するライフコースである早世型の割合の顕著な変化である。アメリカにおいても19世紀の半ば過ぎのコウホートまでは、早世型のライフコースが最も多くの割合を占めていた。アメリカの初期のコウホートにおいて多数を占めた早世型のライフコースがその地位を他のライフコースにとって代わられるのは1890年のコウホートからであり、それまでは30%を超える割合を占めていた。日本との比較でみると、日本の1890年コウホートの早世型は37%であるがアメリカでは1830年コウホートの段階で36%であるから、この頃の日本のコウホートの死亡水準はアメリカの60年以上前のコウホートの水準にあったといえよう。

第二に、アメリカにおいても典型とみなされてきた完結型のライフコースの動向をみると、初期の1830年コウホートでは第二のシェアを占めるとはいえ21%に過ぎず早世型の36%との間に15ポイント

表6 出生コウホート10万人のライフコース別分布の日米比較

ライフコース	対象国	1830年 コウホート	1850年 コウホート	1870年 コウホート	1890年 コウホート	1900年 コウホート	1910年 コウホート	1920年 コウホート	1930年 コウホート
I 早世型	日本	—	—	—	37,200	35,000	29,700	27,100	22,100
	アメリカ	35,600	31,400	30,900	26,300	—	—	10,800	—
II 未婚型	日本	—	—	—	4,800	4,700	5,400	6,800	6,400
	アメリカ	12,900	14,200	17,800	17,800	—	—	10,600	—
III 無子型	日本	—	—	—	7,300	6,600	6,000	6,000	4,900
	アメリカ	9,500	10,000	11,400	12,200	—	—	9,000	—
IV 母死亡型	日本	—	—	—	14,900	14,300	11,800	7,800	4,100
	アメリカ	11,900	11,700	8,700	7,800	—	—	4,000	—
V 未亡人型	日本	—	—	—	13,100	12,000	12,400	8,700	10,300
	アメリカ	9,100	9,800	8,600	8,500	—	—	8,500	—
VI 完結型	日本	—	—	—	22,700	27,400	34,700	43,600	52,200
	アメリカ	20,900	23,000	22,600	27,400	—	—	57,100	—

注：アメリカについては、P. Uhlenberg, "A Study of Cohort Life Cycles: Cohort of Native Born Massachusetts Women, 1830-1920", *Population Studies*, Volume 22, Part 3 (November, 1969), pp. 407-420.

ライフコースのうち、早世型は、日本に関しては15歳未満の死亡数であるが、アメリカに関しては、20歳未満の死亡数である。

の差があり、早世型のライフコースを凌駕するのは1890年のコウホート以降である。完結型のライフコースが早世型をの割合を超えたその要因は死亡率の低下によるものであり、死亡率の低下により早世型が減少すると相まって完結型の増加が見られたのである。日本の同時期のコウホートよりは死亡率水準は低かったが、アメリカにおいて死亡率が急速な低下を示し始めたのは19世紀末の1890年頃のコウホートからであったことが判かる。

一方、日本において完結型のライフコースの割合が早世型を凌駕するにいたるのは、1910年のコウホートからであり、この頃のコウホートから死亡率の改善が着実に進行してきたことを示すといえよう。

第三に、早世型や完結型に比べると各コウホートにおける相対的比重は小さいが、未婚型、無子型のライフコースの割合がアメリカ女性においては日本人女性よりも多い。これは、アメリカ女性において未婚率、無子率が、日本人女性におけるよりも高いことによる。逆に、日本人女性においては、女性は殆ど結婚し、また結婚した場合にはその殆どが産する（皆婚・皆産の慣行）といえよう。

第四に、母死亡型、有子の未亡人型のライフコースの割合は、アメリカ女性における方が日本人女性におけるよりも少ない。これらは、主として二つの要因すなわち、日米の死亡水準の違いによるものと未婚率・無子率といった要素の違いによるものとに分けられる。第一の死亡水準についていえば、初期のコウホートではまだ衛生水準の遅れなどから死亡率水準が日本ではアメリカに比べ一般に高いが、さらに後半のコウホートにおいては戦争の影響などによって死亡率水準が高くなっており、死亡の影響を受ける母死亡型と未亡人型のライフコースの割合を日本人女性において一般的に多くしていると思われる。

また第二の未婚率・無子率についてみれば、アメリカ女性と比較して日本人女性の皆婚・皆産の慣

行がきわだっており、女性自身死亡する場合でも結婚し出産してから死亡する者の割合を多くし、また配偶者に死なれる場合でも出産してから配偶者に先立たれる者の割合を多くする効果をもったといえよう。

こうした未婚率・無子率における日米間の違いは、ひいては日米間の結婚にたいする社会的規制・結婚観の違いと子供観の違いによるものと思われる。すなわち、日本の対象コウホートの多くにおいては50歳までにそのほとんどが結婚し、結婚しないのは30人に1人以下の例外的なケースであるのに対し、アメリカにおいては50歳時の未婚者は5～10人に1人の割合であり、結婚に対する社会的規制がまったく異なるとと思われる。

また日本人女性の無子率の低さについてみれば、日本人女性の結婚年齢の低さと子供観の違いが大きいと思われる。かつての日本においては、女性が結婚するのは子供を産むためであり、子供のいない家族や夫婦というものの存在意義は乏しいとみられていた。こうしたことから、女性は原則として結婚するものであり（皆婚慣行）、また結婚した場合は子供を産むのが女性の務めであり（皆産慣行）、子供のない嫁の立場は非常につらいものであった。これらのことが相まって、アメリカ女性と比較した場合の日本人女性の未婚率と無子率の低さという特徴を形成したと考えられる。

しかし、こうした日本人女性の特徴も、資本主義の進展による女子就業者の増加や戦争による適齢期の男性人口の不均衡などによって、観察対象の末期のコウホートである1930年出生の女性では、アメリカ女性には及ばないにしても、次第に結婚年齢が上昇しそれにつれて出産子供数がかかなり減少し、また生涯未婚率も増大し始めている。こうした後半のコウホートにおける結婚年齢の上昇、出産子供数の減少と未婚率の増大という傾向は、戦後に結婚・出産を経験する新たなコウホートにおいては、戦後の大きな経済・社会変動の影響とともに新たな家族観・結婚観によって一層拍車がかかってきているように思われる。しかし今後のコウホートにおいて、こうした結婚年齢の上昇や生涯未婚率の増大といった現象がどの程度まで進むかの判断はまだ困難な状況にある。

IV 結びにかえて

これまで女性の生涯に関する多くの分析においては日本の社会に生まれた女性とその誕生から死にいたるまでに典型的にたどるとみなされているライフコースについての想定イメージがあり、それが女性の生涯に関する従来の分析の方向をも実質的に支配してきた。それによれば、生まれた女性が幼少期を経て結婚し、出産し子供を育てて、子供が結婚して三世代家族を構成するかまたは独立して巣立っていくまで、夫と生活をともにするというものである。しかし、現実の女性の生涯は、こうした典型的なライフコースだけからなる訳ではない。

本稿では、アーレンバーグがアメリカ女性について行った方法にならい、1980年から1930年出生の日本人女子コウホートについて国勢調査や生命表を用い、結婚、出産、死亡の有無による女性の生涯を幾つかのパターンに分けて、そのライフコース別分布を検討した。結果は、全体として各コウホートの死亡率水準の違いが各ライフコースの割合に与える影響が大きく、死亡水準の効果だけを受ける早世型についてみると、1890年コウホートでは37%、1930年コウホートでは22%が、それぞれ15歳に達する前に死亡することが判明した。また、典型的なライフコースである完結型の割合は、1890年コウホートでは23%であったが、1930年コウホートでは52%まで増加することが認められた。

次に、アメリカ人女性との比較では、日米に共通するのは、初期のコウホートにおける早世型の割合の多さである。これは初期のコウホートにおける死亡率水準の高さによるものである。日米の死亡率水準は同時代のコウホート間では日本人女性の方が若干高いが、より新しいコウホートになるほどその水準の差は小さくなり、戦争による影響を別にすると、日本人コウホートの死亡率の改善は着実

であるといえよう。相対的比重は小さいがアメリカ人女性との比較で顕著なのは、日本人女性において未婚型と無子型のライフコースが少ないことである。これは、日米間の結婚慣行の違いと家族における子供観の違いによると思われる。

今回の作業の成果はいろいろ有り得ると思われるが、ここでは次の点についてだけふれておきたい。それは、これまで家族周期論などの多くの分析において、*a priori* に代表ないし典型とされてきたここでの完結型のライフコースが、それぞれの時代のコウホートの中で占める相対的な比重を明らかにできたことである。

今後に残された課題は多いが、当面の課題についていえば次のようなものであろう。今回の作業では女性のライフコース別の分布にのみ焦点が当てられており、今後の方向としては、これまでのライフサイクル論における研究蓄積を継承するかたちで女性の生涯における時間的要素を積極的に取り入れ、出産時の年齢やこの計算において仮設的に設定した末子の一人前になるときの夫妻の年齢などについて、より実証的なデータをつけ加えるなどのことが今後の課題となると思われる⁸⁾。

Japanese Female Life-courses by Marriage, Child-bearing and Deaths : Cohort Born in 1890-1930.

Yoshikazu WATANABE

The present study aims at analyzing the trends of life-courses among Japanese female cohort born in 1890 to 1930. The methods used here are originally developed by P. Uhlenberg in his fruitful analysis on native born Massachussets women¹⁾.

The definitions of female life-courses used in this study are for the most part same as those in the analysis of Uhlenberg. Namely, a cohort in this study consists of six life-courses. The first category is the abbreviated life-course composed of those female who are dead before their 15th birthday. The second is the spinster life-course defined as those women who survive at age 15 and are single throughout their lifetime. The third is the barren life-course composed of those women who marry but never become mothers. The fourth is the dying mother life-course which composed of those women who marry and become mothers but die before they reach the age 55 which their last child leaves home. The fifth is the widowed mother life-course which consists of those women who marry, become mothers and survive at age 55 but are widowed before that age. The last category is the typical life-course which defined as those women who marry, bear their children and survive with their husband until their last child leaves home²⁾.

Major results of the analysis are as follows ;

(1) In the early cohort (born in 1890), the abbreviated life-course occupied first rank as 37 percent, whereas the typical life-course accounts for 23 percent in the same cohort. But in the later cohort (born in 1930), the situation changed, i.e. the

8) なお、人口学の立場から従来のいわゆるライフサイクル論における問題点と今後の課題についての展望を行った河野稠果「家族人口学の展望」『人口問題研究』第170号(1984年4月), pp.1-17.を参照。

proportion of the abbreviated has declined to 22 percent whereas the share of the typical life-course has increased to 52 percent. These caused by the decline of female mortality in that period of Japan.

(2) For the same period, the proportion of the spinster life-course slightly increased from 5 to 7 percent, and the barren life-course decreased a bit from 7 to 5 percent. Both of the above life-course in Japanese female are relatively minor proportion compared with those of the American women in Uhlenberg's study.

These Japanese-American differences caused by rather low ratio of single among Japanese women and relatively low barren ratio in Japanese married women.

(3) The dying mother life-course amounts to 15 percent in the cohort of 1890, however in the 1930 cohort, the proportion declined to 4 percent for the reason of declining mortality of Japanese female.

(4) The proportion of the widowed mother life-course amounts to 13 percent in the early cohort and slightly decreased to 10 percent in the later cohort. The scanty decline in this life-course originated by the rise of male mortality due to dying on the battlefield at World War II.

1) P.Uhlenberg, "A Study of Cohort Life Cycles : Cohort of Native White Women, 1830-1920"., *Population Studies*, Volume 22. Part 3 (November 1969), pp.407-420.

2) The differences in the definition of life-courses between Uhlenberg's analysis and this study are several points as follow. The first of the alterations is the ages of female and their husband when their last child leaves home. The female age and husband's age at their last child's leaving are 55 and 57 in the American cohort, whereas the Japanese cohort on this study, the ages are 55 and 59 as respectively. The second difference in the definitions is relating to the abbreviated life-course. The abbreviated life course in this Japanese study is defined as those female who have been dead before their 15th birthday, while in America, defined as those female who have been dead before their 20th birthday.